

〔天之国期〕

前五世紀前半、越に滅ぼされた呉の一門は、生きる当てもない難民となつて各地を流浪する者、東海上に乗り出す者、斉に隠れ潜む者、朝鮮や遼寧地方に脱出を図る者らが跡を絶たなかった。そうした中で、呉本家筋の太伯ら子孫は筏船や帆船を操りながら東海上に漕ぎ出すと、黒潮に乗つて琉球諸島沿いに北上し、島原半島や有明海沿岸にたどり着くらしい。

彼らはさらに東行して唐津湾岸や糸島平野に到ると、菜畑や曲り田など湿地帯に分け入つて水田稲作に励む一方、祖霊が天に昇つて太陽（日）になつたと信じて先祖祭祀に入れ込んだ。いつの頃か天之国と銘打つて、日鏡・奥（瀛、興）つ鏡・辺つ鏡で祖霊を日の神として奉つてきた。

【菜畑遺跡】（佐賀県唐津市）、夜臼式期（弥生早期後半の板付Ⅰ式土器期、嚴之国王朝期？）の水田跡下層から、さらに百年以上も遡つた弥生早期初頭（前五世紀中頃）の水田跡四枚や山ノ寺式突帯文系土器が出た。炭化米も二五〇粒ほど出土した。そこでは、直播きだった。

【曲（まが）り田遺跡】（福岡県糸島市）、周囲の水田より二〇数倍ほど小高い丘陵上にある。遺物の見つかる最も古い地層から山ノ寺式土器（長崎県南島原市の山ノ寺遺跡と同類の土器）、竪穴住居跡三〇、住居跡から厚さ四ミリの幅四ミリの鉄片一、支石墓一などが出た。

十六粒の炭化米や土器に付着したモミの痕跡も検出された。

☆本書では、北九州で水田稲作が始まる前五世紀初頭を弥生早期の始まりとしている。

〔オロチ巖之国王朝期〕

前四世紀後半、楚に滅ぼされた越オロチ一門が郎党ともども帆船に分乗して、風の便りに聞き知つた蓬萊三島に楽土を切り開くべく、東海上に漕ぎ出して行つた。

この一団は琉球諸島沿いに北上して薩摩半島坊津辺りに襲来するや、肥沃な筑紫平野や那珂つ

国の都する福岡平野の攻略に向かった。その後の越オロチは、福岡平野に都するオロチ巖之国王朝を樹立すると、天之国から没収した水田区画を押し広げて収穫増を図ったり、那珂川中流域の板付など湿地帯を開墾するなどして越流米づくりに励んだ。

そうした中で、王朝軍は怒涛の勢いで出雲、吉備、摂津、奈良盆地、近江盆地に東征して、要所一門分国を策封するや、天之国勢を先鋒に押し立てながら北陸や東海に攻め入った。

その結果、摂津に小千氏^{おち}、奈良盆地に小蛇^{こおろち}の三輪氏、出雲にオロチ佐太国、北陸に越オロチが割拠してきた。板付遺跡・江道遺跡・牟礼遺跡・中西遺跡・服部遺跡などで、弥生早期後半の水田跡や水路・農具・炭化米が出土したり、北陸地方が越国と呼ばれたりしたのは、これがためだ。

【菜畑遺跡二】、弥生前期の下層から、水田跡と木製農機具、石包丁、弥生早期後半の夜臼式突帯文系土器などが出土し、用水路・井関・畦畔が確認された。

そこでは、よく整備された水田に苗を植え、江南と同じような木製農具を使って田を耕し、さらに収穫米を臼と杵で脱穀して高床倉庫に保管してきた。高床倉庫も典型的な南方系建物だ。これと同じ農耕技術は、前三〇〇〇年頃から長江中・下流域に根づいていた。

【板付遺跡】（福岡市博多区）、弥生前期初めの水田跡を掘り下げたところから、夜臼式期の突帯文系土器（縄文晩期〜弥生早期）や水田跡が出た。用水路・井堰・畦を伴っており、水路からは諸手鍬、水田からも石鎌・炭化米が出土した。前四世紀のもの。銅剣も出土した。

【津島・江道遺跡】（岡山市）、津島岡大遺跡では広範囲にわたって二三〇〇年前の水田跡が出た。江道でも、縄文時代終わり頃から水田稲作が始まったとされる。

【中西遺跡】（奈良県御所市）、近年、二四〇〇年前の水田跡が約九千平方メートルにわたって出た。これまでに確認された水田跡面積とあわせると、二万平方メートルに及び、この時期では最大。

【服部遺跡】（滋賀県守山市）、近畿地方で初めての発見となった約二三〇〇年前の水田跡は、農道や排水路を備える本格的なものだった。

〔倭国王朝期〕

倭国も建国当初から、水田稲作の適地を見つけては先住民を移住させ、米づくりに駆り立ててきた。ほどなく、国を挙げて稲作に本腰を入れ始めた結果、朝鮮半島に住む農民らが北九州に続々と渡ってきた。結局、この時代も朝鮮半島の稲種や農器具による水田稲作が急速に広がった。

【安満（あま）遺跡】（大阪府高槻市）、淀川支流の檜尾川にひらけた平地の小高い所にあつて、淀川水系の中で最も早く出現した集落とされ、前期に集落を囲む環濠が掘られた。

用水路・堰・水田跡、鍬・鋤・杵・杓・おけ・高杯などの木製品、多数の石器が出た。中期前半に集落は拡大し、中期中頃には六〇〇坪四方に広がっていた。

【遠賀川式土器の分布】、弥生早期後半～前期の西日本に分布する土器の総称で、北九州から伊勢湾や敦賀湾を結ぶ線まで広がった。それ以後は、東北系土器が対峙する形で出てくる。

☆本書では、北九州で五世紀初頭を弥生前期の始まりとしている。

〔伊都国の王朝期〕

弥生中期中頃、長野県北部に新たな土器様式（栗林式）をもつ集団が現れた。縄文文化と異質の弥生系磨製石器の生産や供給、木棺墓の使用など弥生文化を有した彼らは、千曲川流域の低湿地帯に松原遺跡（長野市）などを開拓し、稲の栽培を始めた。群馬に移った分派は、低地や谷間に進出して、駒形遺跡（群馬県太田市）等で本格的な水田稲作にまい進した。

【下谷地遺跡】（新潟県柏崎市）、約二〇〇〇年前の弥生中期に栄えた低湿地帯に囲まれた集落跡。水田は見つかっていないが、大量の炭化米・稲穂を刈り取る石包丁、住居や倉庫らしき建物群、溝で方形に囲まれた墓、貯蔵用の壺・煮炊き用かめ等弥生土器が多々出土した。

この前後だろうか、北陸や東海に広がった弥生文化は、北越・関東・東北地方まで広がった。

【中里遺跡】（神奈川県小田原市）、関東地方で最も古い弥生中期前半の集落跡。竪穴住居跡百余棟・掘立柱建物跡七十余棟、方形周溝墓などが見つかった。地元の土器に混じり、兵庫県周辺の土器が発見されたことで、近畿からの入植者が水田稲作を広めた集落とされる。

【北島遺跡】（埼玉県熊谷市）、人工の河川に木製の骨組みで補強した堰が出土した。堰の長さは一メートル、高さ一メートル以上。堰が作られた年代は、弥生中期（前一世紀）と見られている。

【芝野遺跡】（千葉県木更津市）、弥生後期（約一九〇〇年）の水田跡が発見された遺跡で、千葉県内最古の水田。三メートル下ったところに弥生時代の水田跡・菅生遺跡がある。

【番匠地遺跡】（福島県いわき市）、県内初の弥生時代水田跡（約二三〇〇年前）、大畔の土留め用に打ち込んだ矢板が発見された。田んぼの大きさは十〜十二畳。水田跡は十〜十三枚。一九八一年、青森県垂柳遺跡で弥生中期の水田跡が発見されて以降、東北地方でも水田稲作など弥生文化の痕跡が相次いで見つかった。

【中在家南遺跡】（仙台市若林区）、市東部の河川跡や湿地帯に存在した広さ四万平方メートルの遺跡で、遺跡最下層から弥生中期の鍬・鋤・臼・杵など農具、斧の柄、弓や櫂などが出土した。

【杓形遺跡】（仙台市若林区）、約二〇〇〇年前、海岸線から二キロメートル離れた水田地帯（広さ二〇万平方メートル、標高二〜三メートル）に大津波が押し寄せ、約三〇センチメートルの海砂層で覆い尽くされた。

【荒井南遺跡】（仙台市若林区）、現海岸線から四・五キロメートル内陸の湿地帯にあった広さ七万平方メートル、水田区画六八の遺跡。弥生土器や石包丁が出土した。中期の津波被害で廃絶された。

【山王遺跡】（宮城県多賀城市）、北九州の水田稲作は、北陸・関東地方とほぼ同じ頃に、仙台平野に伝わった。山王遺跡では、地下三メートル以上から約二一〇〇年前の水田跡とともに足跡多数が見つかった。その後、水田は大洪水に見舞われ、大量の土砂に覆われて埋没した。